

埼玉県東松山市における都心移動の空間認知に関する歴史地理学的研究

脇 田 武 光

一 はじめに

一つの町ないし都市という空間において、時代毎に変遷する中心（都心）を、どのような観点からどこに認知するかは簡単ではない。

単に政治的区分に基づく地域において、その幾何学的中心を見出せば事足れり、ですまされるような問題ではないのである。

そのため、最初に町・都市の中心（都心）とは何かを定義して置く必要がある。ここで中心（都心）とは、その町・都市における最大多数の人々が日常生活の中心として、最高の価値を認知する場所、ということにする。

このような中心（都心）は、一つの都市については時系列的に見れば、その歴史地理的環境の変化に対応して集落・市街地の分布に変異があり、したがって時代毎に相違するであろうことは十分に推測される。本研究では、埼玉県東松山市（旧松山町）について、歴史地理学的方法により時代別に分析を進め、最後にそれらを総合して要因をまとめ

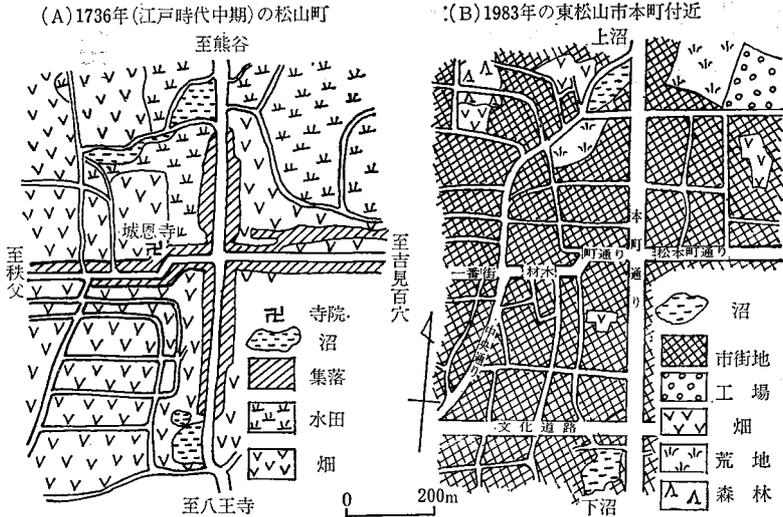


図1 持続の原理が見られる道路パターン

注：かつて町の中心付近にあった城恩寺は、1975年に市役所北西部の松山高校西方に移転。

たい。

二 鎌倉時代

フランスの地理学者ブーラッシュ (P. Vidal de la Blache) は、世界各地の道路・集落に関して「持続の原理 (Principe de durée)」を述べ、それらがひとたび立地すると、よほどのことがない限り長期にわたって永続性を保つ傾向を指摘した¹⁾。事実、

図1の左図は江戸時代中期の旧松山町の道路・集落パターン、右図は最近の東松山市とその付近のパターンである。

かつての農地は、その後の人口増加に伴って大部分が市街地に変ったが、その付近の道路パターンは約二世紀半を経た今日でも持続している実態が観察される。

ここでは、この原理を応用して、地図に示されていない古い時代にさかのぼって、まず空間の復元を

試みるものである。図4の室町時代における空間の復元も、図5の江戸時代中期の地図を基本とし、次の諸条件を加味して作成した。すなわち、元宿・新宿の地名が既に室町時代の記録に見える。

例えば、東松山市史に「松山城（室町時代）が出来て、その領内を松山領、あるいは松山庄と総称するようになり、その城下町として今の元宿辺に次第に人家が密集し始め、それを松山城の本郷、すなわち松山本郷（本郷松山町）と呼ぶようになった」。また、「天正二三年（一五八五）、松山城主上田氏は松山本郷の本宿が手ぜまもとじゆまになったため新市場をおこし……中略……本宿は元宿（今の松本町一帯、図1右図参照）、新市場は新宿（今の市内新宿で元宿より城寄りの市ノ川沿いの一帯）である」⁽²⁾。

さて、主題の鎌倉時代に再び論を返すと、元宿のほぼ地理的中心に位置する妙賢寺の創建は永仁二年（一二九四）の鎌倉時代であり⁽³⁾、この寺院は元宿の集落の発達と密接な関係があると思われる。

また、室町時代以前、当地方の地名にも残っている武蔵武士比企氏・押垂氏・野本氏・高坂氏・吉見氏等の一族が幕府に仕えて勢力を張っていた鎌倉時代の集落は、図2の右下に示すとおり、当時の中央へ通ずる鎌倉道⁽⁴⁾の宿場町として、元宿付近が家屋密度の大なる第一の宿場であり、新宿付近は家屋密度の小なる宿場で実質的には田圃の中に農家が点在していた程度、と推定される。すなわち、元宿・新宿の呼称は、文献の上では室町時代に明瞭に見えるが、実際の集落は室町時代以前で、当地方が重要な道路として脚光を浴びたのは鎌倉時代、と推定されるからである。なぜならば、時の政治的中心地たる鎌倉に通ずる道は、公的・私的の別を問わず交通量が増加してにぎわうことは、古今東西の政治的中心地と周辺の交通関係の歴史が如実に教えるところである。したがって、当地方の道路が最初に見直されたのは、鎌倉への通路としての価値であり、その宿場は中央への連絡地点としての意義を持つものであ

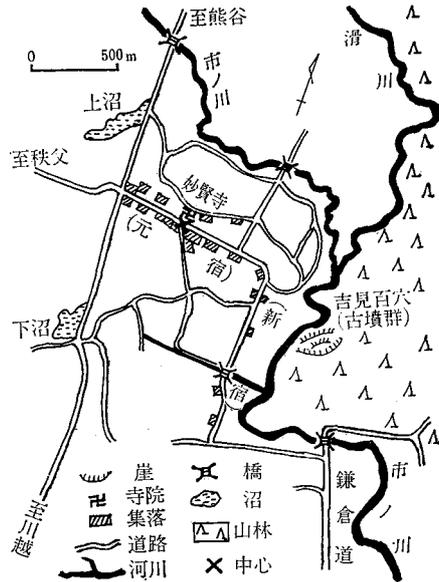


図2 鎌倉時代における松山宿の推定図
注：空白部分の土地利用は田または畑である。

る、との仮説を提唱するものである。したがって、当時の中心は元宿のほぼ地理的中心である妙賢寺付近、と想定される。新宿が元宿よりも集落の発達が遅々として進まなかったのは、後述するように市ノ川の比高を最低として、地形的に西高東低の緩斜面を成し、蛇行の多い市ノ川の氾濫が絶えず、新宿付近の集落立地を阻害したことに起因する。

なお、松山城北方には吉見百穴と呼ばれる古墳群があり、その他に先史時代の遺物・遺蹟も多く発見されているので、当地方には古くから人々が住んでいたことは間違いないが、あまり古い時代になると資料が乏しく集落の復元までは無理である。

った。

しかし、やがて鎌倉幕府滅亡後は、次第にその価値も廃れた。その結果、室町時代の地図には前掲注4に示すとおり、「旧鎌倉道」と「旧」の字がつけられるに至った。それは、今はその価値を失いさびれているが、かつては中央の鎌倉への通路として重要であった、と言う過去の姿、昔日のにぎわいを示唆している、と考えるのは極めて自然であろう。かくして筆者は、鎌倉道の宿場町が元宿の付近にかなり発達し、宿場としての機能は鎌倉時代に端を発す



図3 松山城跡の景観図〔新編武蔵風土記巻197, 東松山市史第1巻所収〕
注:「本丸」以下の文字は筆者加筆, 手前は市ノ川。

三 室町時代

松山城は、秩父山地に続く吉見丘陵の西南端に築かれた山城(図3)で、背後は奥深い松山が続き、前面に流れる市ノ川を天然の堀とし、「市ノ川その麓を流れ、絶壁これに臨み、險要の地なり」⁽⁵⁾といわれた雄姿が図から十分に理解される。当時はその名の示すとおり全山を覆っていた松林も、現在は雑木林が卓越する山に変わり、城跡も雑草の繁茂するに任せて昔日の面影はないが、市ノ川の水面一五メートル、城跡の三角点五七・九メートルで比高差約四三メートルとなる。

室町時代の応永六年(一三九九)に、足利幕府の地方守^{ちがたのかみ}である上田左衛門大夫友直(源範頼の後裔)⁽⁶⁾が築城し、軍事的には南方にあった川越城(平城)の支城であった。天正一八年(一五九〇)、豊臣秀吉による小田原の北条氏攻略で、北条氏の勢力下にあった松山城は川越城と共に破られ、しばらく徳川家康の家臣(松平氏)が城主となり、慶長五年(一六〇〇)に廃城となるまで約二世紀の間、戦国の諸将が攻防

を繰返したが、松山町は城の存在と不可分の関係で発展した。

すなわち、「松山領にかかる村々の本郷なれば、昔より松山本郷と唱え云々」(7)とあるように、文字通り松山城の城下町として、また市ノ川を挟んで西側の平野部と東側の山間部の結節点に発達した市場町としての性格を次第に強めてくるのである。例えば「元龜二年(一五七二)、北条氏、松山本郷町人に市・宿の掟六か条を下付する件」(8)、「当所は五・十の日を定めて市を立て、他の村々より雑穀及び織物の類を持出て交易せり。この市について小田原北条家より出せし掟もあれば旧くより立しこと知らる」(9)。「天正元年(一五七三)、上田長則、松山本郷町人の岩崎与三郎に伝馬・諸公事等の課役を一五年間免除する」(10)、「天正四年、上田長則、松山本郷町人のために駄賃・伝馬、上・下宿の宿地等五か条を定める」(11)、「天正六年、上田長則、松山本郷宿中に、茂呂在陣衆に対して兵糧・馬飼料等を売渡すことを禁止し、松山根古屋足輕衆にその監視を命令する」(12)、「天正九年、上田長則、松山本郷の代官・町人中に三か条の法度を定め、松山領外の商人と領内の郷村民が本郷の市以外において売買を行うことを禁止し、売手の取締りを命令する」(13)、「天正一三年、上田憲定、松山本郷町人の岩崎対馬守・池谷肥前守・大島備後守に新市場創設の功を賞して、宿々の問屋を抱える権利を保証し、合せて本宿・新宿とも町人衆に任せしことを認める」(14)、「そして最後に落城の運命となる豊臣氏の軍勢を前にして「天正一八年、上田憲定、松山に制札を掲げて私領の者、犯科人、負債ある者にも參陣を促し、扶持・褒美・取立等を約し、松山本宿・新宿町人衆に宿中の者すべての松山籠城を呼びかけ、戦後の引立てを約す」においては、先に松山宿中の者が「城の危急の際は籠城して防衛に尽します」と揃って申出たので憲定が「長年この松山宿で生計を立てているからには、この非常時に松山のために役立つことは当然の務めである」と城と松山宿の一体性を強調し総決起を促している(15)。

観音寺の中間に当るT字路付近と想定される。但し、「市ノ川は霖雨すれば水溢する故堤を築いて是にそのふ。此川すべて屈曲多し。大凡九九曲に及ぶ」(16)とあるとおり、松山城から見下す松山本郷は市ノ川(荒川の一支流)の比高を最低とし、西高東低の緩やかな台地状の沖積地に分布し、城下町とはいえ城寄りの新宿は洪水の危険性が大きく、低湿地であるから快適性に乏しく、元宿に比べて集落の発達にはおのずから限界があった。城の北方の根古屋は、少数の足軽が住んだ程度である。

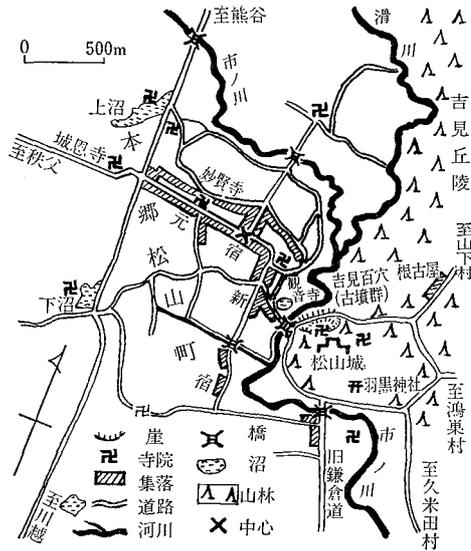


図4 室町時代における松山町の推定図

注：空白部分の土地利用は、主として田または畑である。三日月湖の多い市ノ川とその支流の滑川は、江戸時代よりも蛇行が強かったものとして復元した。

以上の諸事実から、当時の松山町は第一に政治的中心となった松山城の城下町の性格が強く前面に出た。第二に、領主の保護奨励によって市が栄え市場町となった。第三に、鎌倉との関係は必然的に消滅したが、周辺中心地の熊谷・秩父・鴻巣・川越等に通ずる宿場町の性格も存続したことは明らかである。

かくして室町時代に新しく新市場として加わった新宿の集落は、城の吸引力によって前時代よりも人家が増加し、ほぼ図4の如くに推定され、町の中心はやや城寄りに妙賢寺と

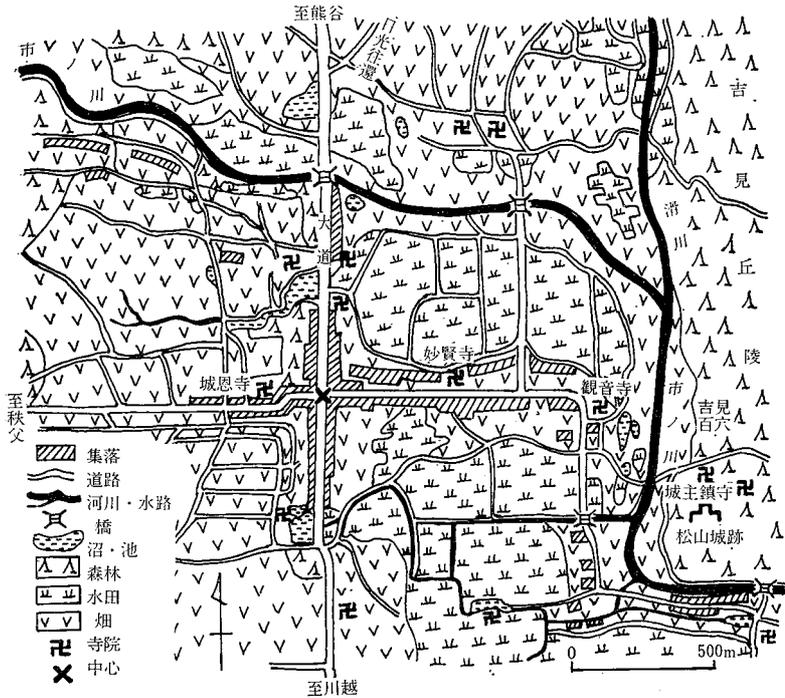


図5 江戸時代中期(元文年=1736)の武州比企郡松山町

注：横見郡御代官所絵図(東松山史所収付図)より作成。

四 江戸時代

江戸時代に入ると、図5に示すとおり、松山町を縦断する南北方向の道路が整備されて「大道」と呼ばれた。すなわち、この通りは中山道の脇往還として、川越を経て江戸に通ずる街道であるから交通が頻繁になり、それに伴って南北方向の道路沿線に宿場町としての街村集落が著しく発達し、現在の本町には本陣・脇本陣も設けられた(17)。

他方、城との関係は完全に消滅して市ノ川橋も廃止された。当時の状況は、次の内容によって知ることができる。「近世に入って町並の発達には現在の本町に移り、中山道の脇往還として八王子千人同心の日光勤の通り道となった宿場町の性

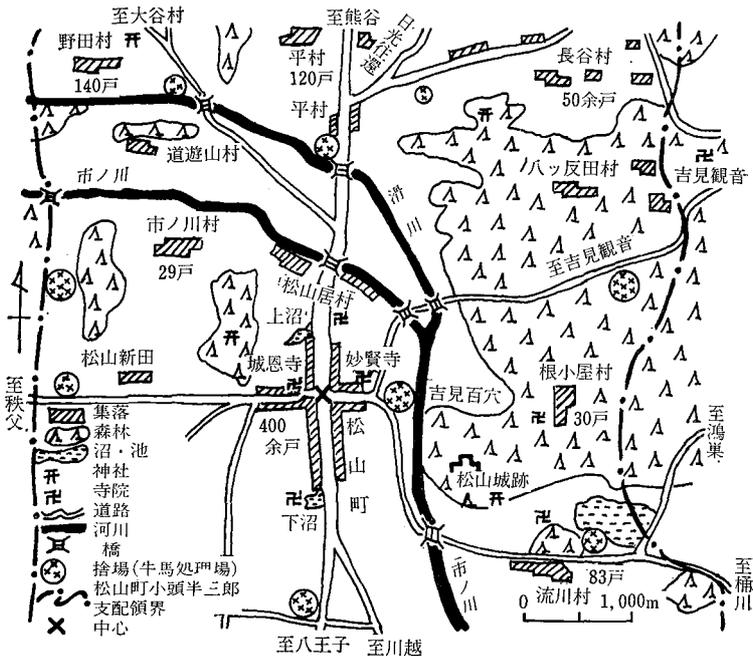


図6 江戸時代末期(文政13年=1830)の武州比企郡松山町

注:1) 小頭半三郎支配職場絵図(東松山市史所収付図)より作成。

2) 但し戸数は明治9年(1876)の武蔵国郡誌第6巻による江戸時代末期のものである。

3) 図の空白部分の土地利用は、田または畑である。

格が付与された。市日は古来五・十の六斉市で、十字路の北を上市、南を下市とし、上市は十日、下市は五日とした。市日には内見世(店舗)と庭見世(露店)の両方で商品を売買した¹⁹⁾。かくして江戸時代中期においては、町の中心は西の城恩寺¹⁹⁾に寄った十字路と想定される。ここは、古くからの元宿・新宿と、新しい宿場町としての大道沿線、及び秩父寄りの城恩寺付近の新集落等の、ほぼ地理的中心に相当する。

江戸時代末期になると図6に示すとおり大道沿線と城恩寺以西の街村集落が著しく発達したが、町の中心は「札^た辻」と呼ばれた十字路になることは中期と変わらない。しかし、旧松山城ゆか

りの菩提寺（城主鎮守）と観音寺の廃寺、とくに後者の旧境内は捨場になり、集落の立地条件の悪い新宿の路村が廃村となった点が注目される。これらの荒廃は、城の存在、城への近接性が、もはや空間認知において完全に価値の外に置かれた実態を意味している。江戸時代中期における新宿の路村の残存は、単にそれまで先祖伝来の土地に住んで来たという地理的習慣性に過ぎなかつたので、新しく時代が変り、城への近接性が無意味となれば、むしろ町の中心から遠く離れて不便であり、水害常襲地帯でもあるから、比高が高く空気も乾燥して快適な西方の台地に住居を移転したくなるのは自然の成行きといえよう。

五 明治から昭和二〇年頃まで

幕末の慶応三年（一八六七）、川越城主であった松平大和守が前橋城へ移城するに伴い、松山町を中心とする領地一六三か村が飛地領となり、その管理のため前橋藩松山陣屋が前橋城の支城として現在の市役所付近に設けられた。その陣屋藩士二五八名は、当時の松山町の人口約一六〇〇人に対して、藩士の家族も含めると大きな人口比率を占めた。この陣屋は明治元年（一八六八）に藩の講学所である博諭堂となり、明治六年に松山学校と称し、一時は城恩寺でも開講していたが、手ざまになつたため明治九年に図7（中央の上）に示す位置に移転した²⁰。これが、現在の松山第一小学校である。明治九年に松山警察署が本町二丁目^{ほんちよう}の田圃の中に開設され、同一二年に比企・横見両郡の郡役所が材木町二丁目の畑に置かれ、同一二年には市ノ川・東平・野田の各村を合併して新制度下の町制を施行し町役場が城恩寺の近くに置かれた。

この時期に、松山町の市街地は本町から西側の新開地である材木町・松葉町方面での発展が著しく、多くの公共施

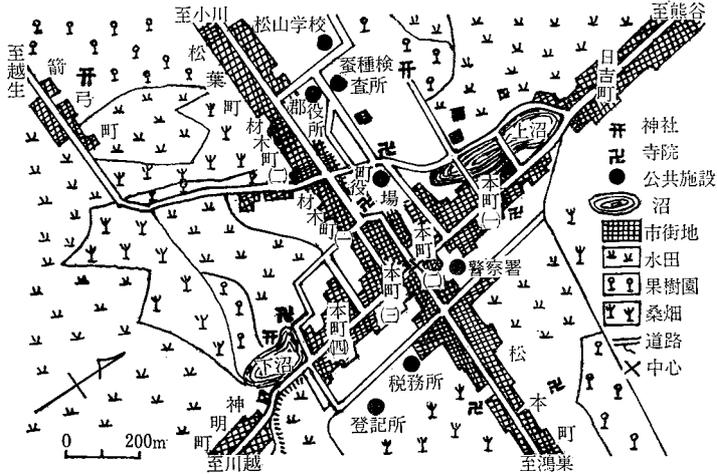


図7 明治～昭和20年頃の比企郡松山町
注：武蔵松山案内（1911）より作成。

設もその付近に新設された。また、平安時代末期の創建で、その後、再三の戦火で消失した^{やましろ}箭弓神社は安土桃山時代末期（文禄三年＝一五九四）に松山城主松平家広が再建した。以後、江戸時代から住民の信仰があつく、小規模ではあるが神社付近に飛地の鳥居前町（箭弓町、図7左上）も見られる。

この時期の町の性格は、まず郡の政治的中心地であり、経済的には米・麦・養蚕・果樹（とくに和梨）等を内容とする農業町であったが、他方、郡における最大の商業中心地として市街地では商店が軒を連ねた。例えば、明治四二年の内訳は商業八五一戸、農業四一〇戸、工業七三戸、職工七〇戸、官公吏五〇戸、力役二六戸、雑業一一〇戸の如く、町の総戸数の半分以上を商業が占め、町の総人口六六三三人の規模^②を考慮すると商店数が多過ぎる。

これは、当時の表現では「比企郡の中央地点、地方物産の集散中核地たることを知るべし」^②とあるとおり、単に町内の消費人口のみでなく、周辺地域の住民をも含めた地域的商業中心地であり、これらの常設店の他にも室町時代以来の定期市が

表 1 松山町の時代別平均地価 (円/反)

(1) 明治13年(1880)の土地利用別地価							
宅地	61.3	田	31.0	畑	14.6	山林	1.5
(2) 大正13年(1924)の地区別宅地地価							
本町	144.6	鉦打町	128.2	松本	113.3	野田	72.0
神明町	128.3	経塚	128.0	東平	82.0	新宿	72.0
桜山	128.3	野沢前	127.8	上高築瀬	74.0	蛇下	63.5
(3) 昭和13年(1938)の地区別宅地賃貸価格							
本町	2,189.1	同心町	294.3	日吉町	242.9	下高築瀬	120.0
材木町	866.8	桜山	291.3	東新田町	241.1	東平	110.4
鉦打町	536.2	経塚	289.7	野田	156.1	新宿	100.0
箭弓町	409.5	神明町	262.0	観音寺裏	146.2	市ノ川	86.7
松葉町	350.2	野沢前	252.7	築本町	130.7	—	—
野沢前	350.0	松本	245.4	上高築瀬	125.5	—	—

- 注：1) 明治13年及び大正13年の数値は、武蔵国比企郡松山町(埼玉県発行)の地券による。
- 2) 昭和13年の数値は、比企郡松山町の土地賃貸価格決定通知書(川越税務署発行)を地区別に集計し、平均したものである。

大正時代の中頃まで続いて露店市も栄えた。

かくして表1に示すとおり、とくに商業で栄えた市街地の宅地は田の約二倍の地価に評価され、以下は田・畑・山林の順に地価が高く、それらは土地収益性にはほぼ対応していると判断される。大正時代になると、町の中心である十字路は「四辻」と呼ばれ、この四辻を中心として南北方向の道路に沿う本町・神明町等の地価が高くなり、とくに本町通りが中心商店街であることを示唆している。他方、かつて城に近く市ノ川沿いの新宿の地価が最低にランクされて、その荒廃ぶりを物語っている。昭和(戦前)に入ると、本町商店街の地価が格段に高水準となり、次に四辻から西の商店街の地価が高くなっていく点が注目される。すなわち、かつて町の中心であった松本町(いわゆる元宿)は、新開地の材木町・松葉町よりも平均して低地価となり、全体として四辻から離れるにつれて地価は低下する傾向を示

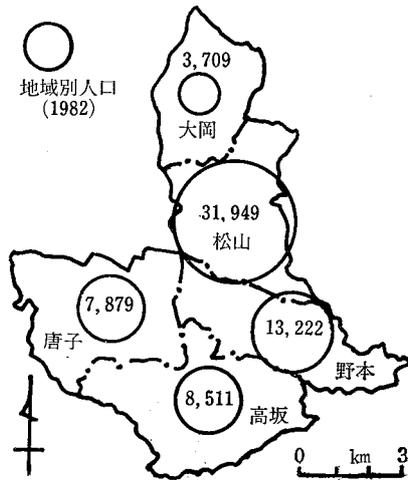


図 8 東松山市の地区別人口 (円の大きさは人口比に比例)

注：人口は東松山統計 (1983) による。
市人口は65,270人である。

す。

一般に都市規模の大小を問わず、その中心 (都心) は空間認知において最高の価値を付与される関係から、都心の境界画定や都心の決定に地価を指標にすることは内外で広く行なわれている⁽²³⁾。したがって、この時期の町の中心は、やはり江戸時代以来の十字路、すなわち「四辻」と認知される。

六 戦後から最近まで

戦後になると、まず昭和二九年 (一九五四) に隣村の大岡・唐子・野本・高坂の四か村と合併し、それまで人口一万六一三四人の松山町は、一挙に三万七〇〇〇人以上に増加し、新しく東松山市として市制を施行した点に注目すべきである。この合併を契機として、その後も着実に人口は増加し、最近では図 8 に示す地区別人口となり、市人口は六万五二七〇人に達し、そのうち半数近くの約三万二〇〇〇人が松山地区 (旧松山町) に集中している。

このような人口急増は、隣村合併による市制施行を契機とし、それに図 9 に示す各種の地域的諸条件を加えた相乗効果が大きなインパクトになったと判断される。

それらの諸条件は、次のとおりである。①まず当市は、埼玉県のほぼ中央部にあり、東京駅から五〇キロメートル

ては、あまり利用することのない雑木林に過ぎなかった丘陵地に、このような大規模な地域開発を行なった意義は大きく、高坂駅西口も開設されることになっている。⑥戦後は東松山駅東口を起点としてバス路線七本が運行され、一日平均のバス利用者数は七一二七人、東松山駅の一日平均乗降客数は二万六六五三人⁽²⁵⁾となり、当市における全体的な交通の流れは、完全に東松山駅を中心とする通勤・通学・買物等の動向を示すパターンに定着した。

⑦他方、大都市近郊で地価が比較的安く広い土地が得られること、東武東上線も開通して交通も便利になったこと等を条件にして、戦前に従業者数一四五人の工場を当市に設立したディーゼル機器は、戦後の今日では従業者数五〇〇人以上の大工場に成長して当市で最大の工場となり、工業化の原動力となった。かくして、昭和四五年以降には市内唐子地区に隣接する滑川村と合せて大規模な東松山工業団地が造成され、その他に野本・大岡の両地区も入れると工場数の増加は著しい。例えば、市制施行の翌年（昭和三〇年）に一〇二工場（従業者数二六三八人）から、昭和五五年には三一七工場（従業者数一万一九五四人）へと急増した⁽²⁶⁾。⑧昭和三〇年頃から中型店（旧丸広・旧島村）が一番街に出店し、昭和四五年頃まで約一五年間、この通りが当市の中心商店街を形成した⁽²⁷⁾。しかし、昭和四一年以降には大型店の丸広デパート（売場面積九八九〇平方メートル）、ショッピングセンター（同四三八六平方メートル）、イトーヨーカ堂（同六八四三平方メートル）等が次々に東松山駅東口付近に進出し⁽²⁸⁾、買物客を吸引して駅付近の商業機能の集積に拍車をかけた。⑨市人口の増加に伴って、病院・学校・公民館・図書館・保育所・官公庁・その他の公共施設が増加し、市関係四二、国・県関係一六の施設⁽²⁹⁾が松山地区、とくに東松山駅周辺に集積して駅的重要性を高め、それに対応して昭和四九年には駅西口も開設された。

以上の諸条件により市全体の産業構造は大きく変化し、農業人口の激減⁽³⁰⁾と、代って第二次・三次産業人口の増

表 2 業種別就業人口と割合の推移

産業の種類	1955年		1980年		増減割合 (%)
	就業人口 (人)	割合 (%)	就業人口 (人)	割合 (%)	
総 数	16,998	100	29,462	100	—
第1次産業	9,415	55.4	2,494	8.5	-46.9
農 業	9,402	55.4	2,487	8.5	-46.9
林業・狩猟業	7	0	2	0	0
漁業・養殖業	6	0	5	0	0
第2次産業	3,021	17.8	12,827	43.5	+25.7
鉱 業	32	0.2	14	0.1	-0.1
建 設 業	507	3.0	2,428	8.2	+ 5.2
製 造 業	2,482	14.6	10,385	35.2	+20.6
第3次産業	4,562	26.8	14,141	48.0	+21.2
卸売・小売業	1,929	11.3	5,564	18.9	+ 7.6
金融・不動産業	183	1.1	965	3.3	+ 2.2
運輸・通信業	478	2.8	1,503	5.1	+ 2.3
電気・ガス・水道	42	0.2	171	0.6	+ 0.4
サービス業	1,593	9.4	5,045	17.1	+ 7.7
公 務	337	2.0	893	3.0	+ 1.0

注：市統計課の資料による。

加が著しく、かつての農業町から商業都市・工業都市に変質した(表2)。

いま、図10によって市全体の土地利用と地価(固定資産税用)の分布を検討すると、東松山駅東口の商業地区に高地価帯が集中的に見られ、次にその周辺の住宅地区・工業地区と続く。これらの土地利用別平均地価(平方メートル当り)は、商業地六万七七一六七円、住宅地一万九七六三円、工業地一万八四八〇円、田六一円、畑四一円、山林三三円となる(31)。これらの中で、高地価帯が集中的に見られる商業地区が、ダウン(C.M. Down)のいう都市のハードコア(hard core 中心核)であり(32)、この中のどこかにさらに狭義の中心(都心)が点として認知されるはずである。

この中心(都心)を確定する前に、当市の

秩父村である。近隣地域で東松山市の商圏に入るものは主として比企郡内町村、郡外では北方の大里郡大里村、西方の秩父郡東
 近隣地域の中で、北には東松山市より高次都市の熊谷市、東には東松山市と同レベルの鴻巣市、南には東松山市よ
 り高次都市の坂戸市・川越市が分布する。一般に、都市が近隣地域から買物に吸引する力は都市の人口比に比例す

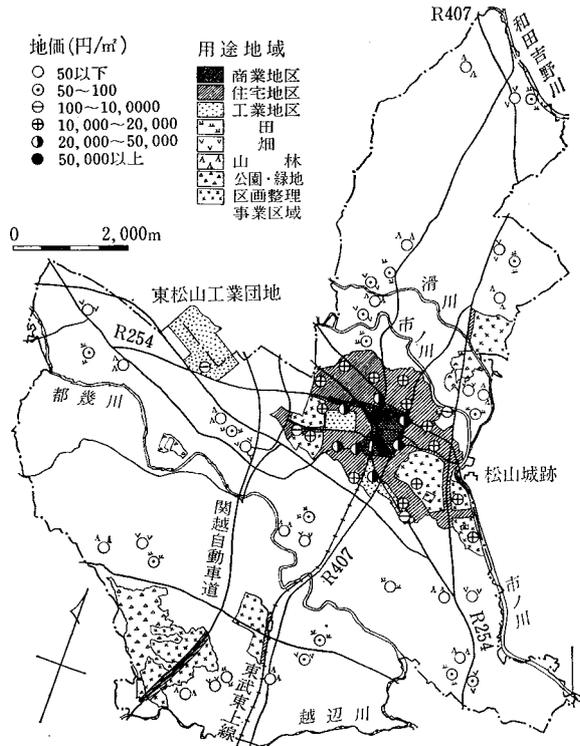


図10 土地利用別地価の分布
 注：1) 地価は固定資産税評価額（1982）で市の資料による。
 2) その他の空白部分の土地利用は田・畑・山林・原野を含む村落地区である。

商業機能の集積規模に不可分の関係を有し、ひいてはハードコアの形成に関与していると推測される、近隣地域とその買物動向の実態を把握する必要がある（図11）。これによると、東松山市自体は地元人口の約九〇%を吸引しているが、市外を指向する東松山市民は東京都四・七%、川越市三・六%が主となり、買物依存度から見ても東京都の衛星都市的な一面を示している

商圏の後背地は西方に広いので、今後は西口前がより発展する可能性があらう。

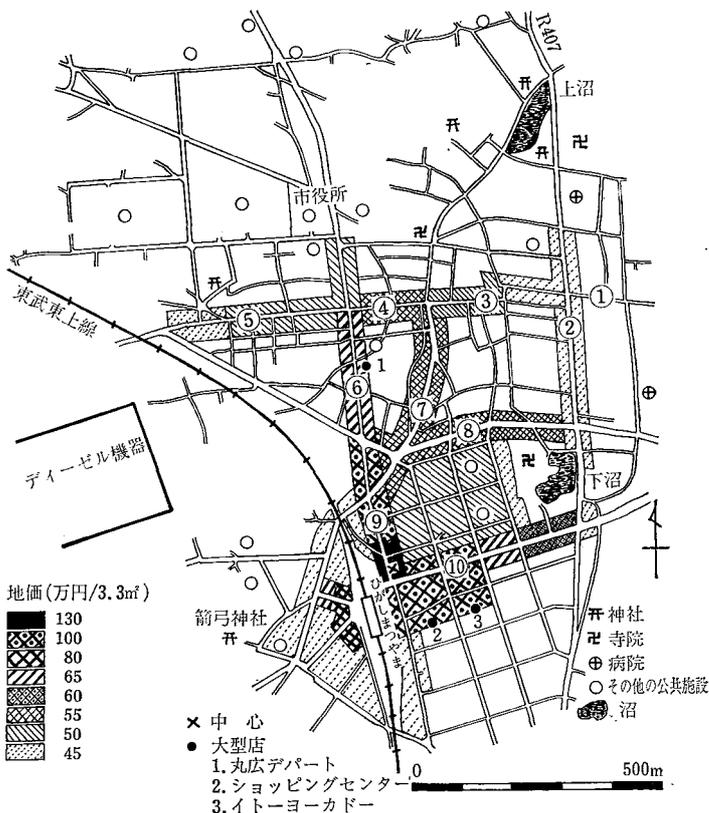


図12 商店街の地価分布と中心

注：地価は売買価格の地価（1983）で、地元不動産業S商事の資料による。

- ① 松本町（元宿）通り、② 本町通り、③ 材木町通り、
④ 一番街通り、⑤ 松葉町通り、⑥ 丸広通り、⑦ 中央通り、
⑧ 文化道路、⑨ ぼたん通り、⑩ 駅前通り

して地価は商業地の最低レベルの四五万円にとどまるに至った。この枯衰商店街の例は、静岡県清水市興津地区における国道一号線沿線の例³⁴と類似している。

駅西口前の地価は八〇万円であるが、長期的に見れば当市の

表 3 時代別に見た地域性・都心の形成

時代	地域性	中心（都心）	都心形成の主要因
鎌倉時代	宿場町（元宿・新宿）	元町の地理的中心（妙賢寺付近）	鎌倉へ通ずる宿場町、高燥な台地状の元町付近は住宅立地に好条件
室町時代	城下町・市場町・宿場町	前時代よりも城に寄ったT字路	松山城の市街地に対する吸引力大、山地と平地の結節点で市が発達、周辺地域に通ずる宿場町
江戸時代	宿場町・市場町	前時代よりも城から遠ざかった十字路（札辻と呼ぶ）	中山道の脇往還として南北方向の交通量が増加し大道沿線に新しい宿場が発達、十字路を境に上市・下市が栄える、城跡近くの新宿の路村は荒廃し代って大道以西に街村集落が発達
明治～昭和20年頃	郡の政治的中心地、地域的商業中心地、農業町	十字路（大正時代から四辻と呼ぶ）	大道以西の新開地に公共施設が進出、商店街は十字路を中心に東西南北の街路に沿って発達
戦後～最近	地域的商業中心地・工業都市	東松山駅東口前	町村合併により市制施行、交通改善により近隣地域・東京都への近接性が強まり住宅化・工業化が進み消費人口増大、市全体の交通の流れは駅中心のパターンに定着、大型店を初め商業機能の集積は駅前

七 まとめ

以上の東松山市における時代別の地域性・中心（都心）の形成は、表3のよう
にまとめることができる。

鎌倉時代には、当時の幕府の所在地たる鎌倉に通ずる鎌倉道の宿場町として、住宅の立地条件に恵まれた元宿付近に発達した街村集落は、同じ宿場機能でも室町時代になると中央への通路の意味は自然消滅し、代りに周辺地域への通路という内容に変質した。さらに江戸時代になると、宿場機能としては江戸・日光間の脇往還として南北方向の大道に沿う街村が特に重要な意味を持ち、したがって、集落の発達は元宿よりも大道沿線においてとくに著しい。

室町時代に、山地住民と平地住民との間に行なわれた市は、松山城主の城下町に対する経済的繁栄策としてその保護奨励を受け、松山町は近隣地域を含めた定期市の市場町として発展したが、これは明治以降において当市が地域の商業中心地となる基礎を築いた。

江戸・明治時代を経て昭和二〇年頃までの間、最も長期にわたって町の中心と認知される十字路の存続、及び宿場町・市場町の時代を超えた存続等の現象は、空間認知に関して「持続の原理」ないし「地理的慣性」によって説明できる範囲が極めて多い傾向を知るものである。

他方、根強く持続するかに見える現象も、時代の推移に伴う歴史地理的環境の変化に対応して、やがて明らかに変化を招来するものも現われる。すなわち、鎌倉時代の町の中心（妙賢寺付近）が室町時代にT字路に移動したのは、地域の政治的中心として城下町に絶対的な支配権を確立していた松山城の吸引力によるものである。しかし、江戸時代になって町の中心が十字路に移動したのは、廃城に伴う城の吸引力の消滅と、江戸・日光間を結ぶ南北方向の大道沿線に新しく宿場が発達したことに起因する。戦後、中型店の出店により一番街が中心になった時期もあったが、最近では東松山駅東口前に都心は移動した。これは市全体の交通の流れが東松山駅を中心とするパターンに定着し、これに対応して駅前的大型店を初め商業機能の集積が著しく、近隣地域を含めた地域的商業中心地（商業中核都市）として駅付近に歩行者交通量を増大させたが、古くからの中心商店街であった本町通りは自動車交通量が多くなり過ぎ、買物行動に不適となり枯衰した、等の事情による。

このように、一都市の空間における中心（都心）の認知に焦点をしぼり、その歴史地理的分析を通して時代毎の地域性を把握できると同時に、そこに見られる地理的諸現象の持続と変化の両面に関する要因を明らかにすることがで

きた。

付記

本研究を進めるに当り、東松山市建設部長千代田迪之、市史編さん課長小峰啓太郎ほか同課の職員、税務課長三木孔治、商工課長秋山武司、ほか戸井田忠純・金子守・亀井幸一の各係長、杉浦商事杉浦竹男の各氏にお世話になったことを記し、感謝の意を表する。

注

- (1) Blache, P. Vidal de la : Principes de Géographie Humaine. Paris, 1922. 飯塚浩二訳『人文地理学原理下』岩波書店、一九四〇、一五七～一六一頁
- (2) 東松山市史編さん課『東松山市史第二卷』東松山市、一九八二、五三二～五三四頁
- (3) 住職より聞取りによれば初めは真言宗、間もなく日蓮宗に改宗した。古くは妙光寺と称したが、大正二年(一九一三)に妙賢寺と改称。江戸時代中期の絵図に妙天寺とあるのは誤記と思われる。
- (4) 「旧鎌倉道」の文字は前掲(2)『第一卷』一九八一、三九一頁に室町時代の「松山古城址要図」に記されている。
- (5) 太田為三郎編『帝国地名辞典』三省堂書店、一九二二(但し本引用書は一九七四、名著出版より再版されたものである)、一四五四頁
- (6) 源頼朝の弟である範頼は、平治の乱後に吉見町大字御所(現在、息障院と称する寺院の境内)に住んだ。当時の村人は貴んで吉見御所と呼んだことが、今日の大字の地名として残った。
- (7) 長沢一雄編『新編武蔵風土記稿』雄山閣、一九七一、三七頁(但し原本は江戸幕府の編さんによる)。
- (8) 市日は五・十の日で、当日やって来る商人の保護、濁酒屋で乱暴する者の取締り、松山宿への陣夫以外の課役の免除等が骨子である。前掲(2)、四八八～四八九頁
- (9) 前掲(2)、四八九頁によれば五・十を市日とする六斎市であった。

- (10) 松山町の名主を代々務め、本郷町人衆の中心人物たる岩崎氏を通じて町全体を掌握しようとする城主の意図が明らかである。前掲(2)、四九三～四九四頁
- (11) 松山本郷には上宿と下宿、されにその裏地にも三間の裏屋敷があり、非課税の特権を与えられた。宿の人々は、市内の高坂方面から人や物を運ぶ駄賃稼ぎ、大名の伝馬の継立てに当った。前掲(2)、五〇二～五〇三頁
- (12) 茂呂は現在の入間郡毛呂町で、ここに北条氏照の軍陣が置かれていて、それに関与してはならぬ。もし出荷すればその荷馬を没収すると定めた荷留令である。前掲(2)、五〇七頁
- (13) 松山領の商取引を松山本郷に集中して町の経済の繁栄と物流の統制を図った。前掲(2)、五一七～五一八頁
- (14) 新市場を新宿におこした町の顔役たる功労者を優遇して統制を図った。商人達のトラブルは町人衆に任せる町人さばきとし、町人の自治を認めた。前掲(2)、五一七～五一八頁
- (15) 前掲(2)、五五五～五五九頁
- (16) 前掲(7)、二二八～二二九頁
- (17) 地域研究会熊谷支部「東松山市における都市化現象の地理的研究」ロータス第十一号(立正大学)、一九七七、三頁
- (18) 前掲(2)『第三卷』一九八三、三三八～三四八頁
- (19) 天文元年(一五三二)、松山城主の弟が開基した関係が寺の名称に現われている。浄土宗(住職からの聞き取りによる)。
- (20) 松山陣屋研究会『前橋藩松山陣屋』第一印刷KK、一九七九、一～一三八頁
- (21) 横尾本瑞編『武蔵松山案内』文耕舎活版所、一九二一、一三～一八頁
- (22) 前掲(21)、三〇～三六頁
- (23) 田辺健一『都市の地域構造』大明堂、一九七二、七〇～七八頁
- (24) 杉村暢二『中心商店街』古今書院、一九七五、一五三～一五六頁
- Murphy, R. E. and Vance, J. E., Jr.: 'Delimiting the CBD', *Eco. Geog.*, 30, 1954, pp. 189~222. Ditto: 'Internal Structure of the CBD', *Eco. Geog.*, 31, 1955, pp. 21~46
- Duckert, W.: 'Die Stadtmite als Stadtzentrum und Stadtkern Funktionale und physiognomische Aspekte ihrer

- Nutzung am Beispiel von Darmstadt', Die Erde, 99, 1968, SS. 209~235
- Knos, D.S.: 'The Distribution of Land Values in Topeka, Kansas' (Berry, B.J.L. and Marble, D.F.: *Spatial Analysis*, New Jersey, 1962), pp. 271~273
- Davies, D.H.: 'The Distribution of the Hard Core of the Central Business District of Cape Town' (Carter, H.: *The Study of Urban Geography*, London, 1972), pp. 203~204
- Anstey, B.: 'Isopleths of Land Values in the Old Barbican Area of London' (op. cit., Carter's book), pp. 194~196
- (24) 市内の住宅公団における分譲住宅の統計(市企画課調べ)による。
- (25) 昭和五年の数値。同じ市内でも高坂駅の一日平均乗降客数は一万四五六三人で東松山駅の約半分であるが、これは大東文科大学東松山校舎・東京電機大学鳩山校舎の学生でほとんどを占める。
- (26) 東松山市商工課『東松山統計』東松山市、一九八三、二七頁
- (27) 鈴木雄幸『東松山市の経済』大洋印刷所、一九八一、一〇三~一〇四頁
- (28) 東松山市商工課の資料による。
- (29) 東松山市広報課『市勢要覧』東松山市、一九八三、一九頁
- (30) 例えば町村合併直前の昭和二五年に農家数三四四六戸から、昭和五五年に二五六二戸(うち八〇%が第二種兼業農家)となった。かつて農業町であった名残りは、東平地区における観光農園の梨狩り(八月中旬~一〇月初旬)に僅かに見られ、梨組合(組合員二七人)を結成、品種は幸水・長十郎・新高である(市統計課資料)。
- (31) 資産税課の資料による。これらの地価のうち、宅地(商業地・住宅地・工業地)の一八画地を標本にし、所得(平方メートル当りX円)と地価(平方メートル当りY円)の関係は、 $Y = 0.7015545X + 47113.75$, $r = 0.4380866$ となった。帰無仮説の検定は、 $\alpha = 0.10$, $f = 16$, $ta = 1.7459$, $t = 1.9494$ 有意。
- (32) Down, C.M.: 'CBD and Hard Core' (Murphy, R.E. and Vance, J.E., opt. cit. 22), pp. 192~193
- (33) 脇田武光『立地論読本』大明堂、一九八三、二〇二~二〇八頁
- (34) 脇田武光『清水市與津地区における地価の変動と分布』経済地理学年報二二二、一九七七、二五~三六頁